

ジャクソン・ポロックの 『インディアンレッドの地の壁画』 の今日的意義

伊藤 眞作

今朝、アベ内閣と自・公・維らは、「共謀罪」を強行採決した。

普通の市民が、世の中を良くしたいと思うだけで罪になる。だから、どこの家でも、ケイサツに踏み込まれはすまいか、スマホは、ケータイは、電話は、インターネットは、密告もあるとか。人さわがせこの上もない。

今日を境として、日本中どこでも一挙に不安な社会へと質的に一変させられたのだ。なぜ？わからない。誰が？それは明らかだ。

とにかくハガキは10円上ったし、ビールも上った。国保料も上がるとか、上らないのは給料だけ。(いや、正直に言えば、下がり続けている)

他方、森友学園と加計学園を合計すると、141億円余のムダ遣いがあると聞く。この巨額にのぼる大金。この政権の阿呆らしさ。

うっそうと、自分のまわりをグルグル巻きに繁茂し切った得も言われぬ不安。そこでは一切の言葉は意味を失なう。これは何を求めて、どこへ行こうとしているのか、それを何より知りたいのだ。

アメリカの20世紀最大の天才画家、ジャクソン・ポロックの傑作『インディアンレッドの地の壁画』は、このきょうの日本人の心境をリアルに写しとっている。是非カラーの大きいので見てほしい。67年前にブームをひき起したこの絵画は、私に大声で叫ぶ「スグにアベ政権を倒せ」と。

とにかく、全国どこでも51%の得票率をとりさえすれば必ず政権がとれる。かって民主党がやった道だ。いまでは、市民と諸団体の推す、四野党と一会派が、その道を目指している。アベ首相の大好きな「道徳」の例で話せば「(アベ一強)よりも(四野党と一会派)の方が強い」ことは、三本の矢の理でも明らかなことだ。

共謀罪を撤回させ、今の政治をすっかり変える新たなたたかいを起そう。その声はビンビンひびいてくる。ひき続き市民と共にあゆもう。そこには、怖いものはないからだ。闘いは、今から。(2017. 6/15記ス)



『インデアンレッドの地の壁画』 ジャクソン・ポロック